

生存科学研究ニュース

VOL. 16. NO. 3 2001. 5. 10 発行

発行 財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
電話 03-3563-3518 FAX 03-3567-3608
Eメール seizon@mx1.alpha-web.ne.jp

平成12年度第2回評議員会

平成13年3月8日（木）、生存科学研究所会議室において表記会議が開催された。

江見理事長が開会の挨拶を行い、出席評議員の互選により向山評議員が議長に就任した。審議の結果、下記の通りとなった。

1.平成13年度事業計画について

理事長より平成13年度事業計画について説明があり、審議の結果全員一致で承認された。（事業計画の内容は生存科学研究ニュース2001.3.10号参照）

2.平成13年度収支予算について

鈴木専務理事より平成13年度収支予算について説明があり、審議の結果全員一致で承認された。

3.役員改選について

評議員による投票により13名の新理事が選出された。また、監事は大内幸夫、小川春男両氏の留任が決定した。（新理事は別紙参照）

平成13年度第1回理事会

平成13年4月13日（金）生存科学研究所会議室において表記会議が開催された。

江見理事長が議長に就任し、下記について審議が行われた。

1.理事長および執行体制の決定

新執行部には、理事長 江見康一、副理事長 大塚正徳、専務理事 鈴木雪夫各氏の留任が決定した。また、常務理事の人選については3役に一任することが決定した。

2.評議員の選任について

審議の結果、

浅野茂隆、石井威望、伊藤正男
江橋節郎、香川保一、粕谷 豊
吉川 暉、坂上正道、清水 博
高瀬 淨、筑井甚吉、中谷瑾子
中山昌作、土方正夫、藤井正雄
向山定孝、村上陽一郎

の各氏は留任と決定。さらに2名の追加については三役一任が提案され、全員了承した。

生存学研究会と名称変更してからは形式を変え、あらかじめ決めたテーマに沿ってそれぞれ異なった分野からの専門家2～3人を、スピーカーとしてではなくコメンテーターとして依頼した。それぞれ15分程度、多角的な問題提起やヒントを出していただいた後、集まった人達によって4時間に亘り自由討論を行ってきた。

去る3月4日（日）、東海大学校友会館において「次世代、次々世代、どうなる日本」をテーマに討論会を開催した。これは「生存の理法」を追い求めてきた総括としての発題であった。

会は日高敏隆研究会代表を中心に、これまでのテーマにも触れながら、究極「人間とは何なのか？」が中心の話題となった。とりわけ熱心に論じられたのは「プログラム」（この場合は赤ん坊が個々に持って生まれたDNAを指す）と、成長と共に受ける「環境からの学習」をどこでどう区別するか、であった。この話は単純に両者を分けて論じられる傾向があるが、突っ込んで考えていくと、この二つはクロスするもので、分けて考えられるべきでないことを再認識させられた。ホモサピエンスとは「賢い人」と訳されているが、文明人ほど、結果的にはおろかな所業を続けているのではないか。

現在でも世界各地で原始さながらの生活形態を続けている少数部族がいることが多数報告されている。文明人はこの人達を未開人と

蔑んでいるようだが、生存し続けるための智慧は遥かに勝っていると思う。これぞホモサピエンスなのではないか？文明人はそこへ戻れないことこそ最大の悲劇といえよう。

こんな話が出た。変温動物は食物を入手しにくい極寒期には新陳代謝を下げ体内に蓄積したエネルギーを最小限に消費しながら冬眠という形で越冬する。これは、親や周囲の状況から学習したものではなく、進化の中でプログラムされたものだ。一方、恒温動物は冬眠できない為、無理をして越冬する準備をし、ためこむ技術を開発しなければ生きて行けなかった。これが愚かな文明の発達要因の一つであるというのなら、変温動物の方が、最も環境に適応する形でプログラムされた、より進化した動物ではないか。この発言には一同只々考え込んでしまうしかなかった。

参加した一女性から、日々ささやかでもボランティアをし続けている自分の思いや実践の現状が述べられたが、老大家を自負する男性の方々は無関心、無反応で、生存学と実践とは結び付かないのか、と虚しさを強く覚えた。

あれから1ヵ月経ったいまも、討論のなかで提起された諸問題が去来して、消えやらず悩み続けている次第である。

そして改めて武見太郎先生の「生存の理法」という壮大な哲学思想に頭を垂れる。

（文責：卜部文磨）

第2回 21世紀における生存科学としてのバイオエシックスの構築研究会報告

上記研究会が3月29日（木）午後6時より開催された。

「現在の生命科学・先端医療技術研究の状況を踏まえ、今から10年後の状況を科学的な可能性を厳密に考察し、極近未来的なバイオエシックスの議論を創出することによって、今日の生命科学・医療の研究・実践への現実的な倫理指針を研究し提示することを試みる」とする研究会の目的と、これからの研究会活動についての議論を踏まえて、今回から先端的な生命科学・医療技術の専門家をゲストに招き研究会を開催することにした。

今回はその最初の試みとして、早稲田大学理工学部機械工学科教授の三輪敬之氏を迎え、「ITメディア空間と場的空間について-信頼性の創出技術を目指して-」をテーマにお話しいただき、その後ディスカッションを行った。

先生は、まず近代社会における「科学的論理」、「因果的世界」、「自他分離的技術」の限界を指摘され、これからの情報化社会の生命化の必要性を指摘し、その生命社会における「生命的論理」、「生成律的世界」、「自他非分離的技術（場の技術）」の必要性を述べられた。さらに現在いわれている「IT革命」における「情報」概念には記号化され明在化されている「報」だけが扱われ、「場の状況」のコンテキストや自己の内部に生成される空間・時間の共有ということが議論されていないことを示された。それを受けて、生命的コミュニケーションの可能性について論じ

られた。

具体的な研究の紹介では、特に、バーチャルな空間での人間のコミュニケーションについて興味深いお話を伺った。現在、テレビ会議などインターネットなどを利用する会議が多く行われるようになったが、直接会っての会議とは異なり、依然として人間的なコミュニケーションがとりにくいという難点が多々指摘されているという。このような問題を克服するために、先生は、「共存在」感の創出を可能にする「場的空間」における、視覚だけでなく他の感覚の利用や母子間に見られる相互相関現象など、自己の「領域性」の拡大などを取り込むことの技術的可能性をロボット工学やバーチャルリアリティ技術の研究例に基づき紹介された。

最後に、これからの介護ロボットの開発に関連して、人間が転んでから助けるロボットではなく、転ぶ前に助けるロボットが求められるのであり、そのためには上記の生命的コミュニケーションの成立が必要であると述べられたのが印象的であった。

以上の大変刺激的なお話しを受けディスカッションに移ったが、バーチャル技術やインターネットを利用した手術や遠隔医療の開発が積極的に行われていることとの関連で、そのような技術が人間存在の根本に触れ始めていることが分かり、これからのバイオエシックスにとって大きな問題を投げかけていることについておおいに議論された。

（大林雅之記）

第12回
銀座ナイトセミナー「生きる」報告

2001年2月27日（火）午後6時より、財務省診療所チーフカウンセラーの栗原雅直氏を招いて、表記セミナー「ひねくれ医者『生きる』」が開かれた。

栗原氏は小学生の頃「3cm×4cm×5cmの紙の箱に水は何cc入るか？」という質問に「約60cc」と答えたということである。紙がゆがんだり表面張力の関係で「約」とつけたそうである。通常60ccと書くことが求められているが、ここで大多数の説に従うべきかという岐路が生じる。これが氏の「ひねくれ」の始まり。

医学部入学後は「文武両道」ならぬ「文医両道」をめざし、creativeなことを目指す。語学には尋常ならぬ精力を傾けて学習した。精神科へ入局したあと、フランスへ留学する。当時はクロールプロマジンが開発されるなど精神薬理学の黎明期。その中心的存在であるサンタンヌ大学の精神薬理学教室に籍をおいた。その後WHO事務総長となる中嶋宏氏が当時唯一の日本人としておられた。

フランスにおける日本人社会は、パリの日本人館、旧・薩摩館を中心としており、そこで氏はクセの多い日本人のとりまとめなどをしてきた。帰国後、虎の門病院が精神科を開設するにあたり、それまでとは違う、患者が中心となる精神科医療を開始する。それまでの男女の病棟の隔たり、医師や看護婦と患者間のトイレの別、などを廃止し、患者を全く

区別しないでとりあつかう(壁のない病室：異常と正常のはざままで。中央公論社, 1990)。それは患者のみならず医療従事者にも好影響を及ぼした。例えば看護婦が他病棟へ移動したあと、そうした患者に病院内で自ら対応できるようになった。とかく世の中から批判される大蔵省であったが、その中の従業員の健診システムはそれまで不十分であったが、氏はそれを一応システムとして構築した。精神管理のシステムもつくりあげた。

患者をしっかりとみることを基本にしたが、1960年後半の学閥闘争時にも、研究は止めるべきでないと言言していた。1970年代始めより、佐藤倚男氏らとともに、コントローラー委員会を設立し、ヒトを用いての薬効評価の計画・実施・解析などに関与するようになった。

ロールシャッハ・テストで、穴のあいたところ、白黒を逆転して解釈し、「ランプ」と答える特性、人の反対を考える傾向があるとされるが、どうも氏は、反応から見てそれらしい、とのことである。ある面「ひねくれ」で、人とちがうということを押し通すのも、「正しい」道にいたることなのであろう。

討論では、日本の薬効評価の開始時におけるアカデミアと企業の関係、科学と人間の関係など、活発に議論された。(津谷喜一郎)

研究所日報

3月8日(木)	平成12年度第2回評議員会
3月29日(木)	第2回生存科学としてのバイオエシックスの構築
4月13日(金)	第1回理事会
4月24日(火)	第2回3役会

役員

理事長 江見 康一
一橋大学名誉教授
帝京大学名誉教授

副理事長 大塚 正徳
東京医科歯科大学名誉教授

専務理事 鈴木 雪夫
東京大学名誉教授
多摩大学名誉教授

常務理事

小島 静二 小島歯科クリニック院長

府川 哲夫 国立社会保障・人口問題研究所部長

藤原 成一 日本大学芸術学部教授

丸井 英二 順天堂大学医学部教授

理事

青木 清 上智大学理工学部教授

梅園 忠 千葉県医師会副会長
梅園内科医院院長

大林 雅之 山口大学医学部教授

川崎 富作 日本川崎病研究センター所長
久留米大学医学部客員教授

高木 廣文 新潟大学医学部教授

津谷喜一郎 東京大学大学院薬学系研究科医薬経営学客員教授

監事

大内 幸夫 経済評論家

小川 春男 亜細亜大学国際関係学部教授

評議員

浅野 茂隆 東京大学教授
東京大学医科学研究所附属病院院長

石井 威望 東京大学名誉教授
慶応義塾大学客員教授

伊藤 正男 理化学研究所脳科学総合研究センター所長
東京大学名誉教授

江橋 節郎 東京大学名誉教授
岡崎国立共同研究機構生理学研究科名誉教授

太田 幹二 科研製薬株式会社相談役

香川 保一 弁護士
元最高裁判所判事

粕谷 豊 東京大学名誉教授

吉川 暉 (社)大分県医師会会長

坂上 正道 人間総合科学大学学長
北里大学名誉教授

清水 博 金沢工業大学教授
場の研究所所長
東京大学名誉教授

高瀬 淨 秀明大学学長

田中 慶司 厚生労働省近畿厚生局局長

筑井 甚吉 大阪大学名誉教授

中谷 瑾子 弁護士
慶應義塾大学名誉教授

中山 昌作 中山内科医院院長

土方 正夫 早稲田大学社会科学部教授

藤井 正雄 大正大学教授

向山 定孝 三井業際研究所顧問

村上陽一郎 東京大学名誉教授
国際基督教大学大学院部長